報　告

小児医療専門施設におけるきょうだい支援の現状

石川　紀子[1)]，西野　郁子[1)]，堂前　有香[2)]，藤岡　寛[3)]

〔論文要旨〕

小児医療専門施設における健康障害をもつ子どものきょうだいに対する支援の現状を明らかにする目的で，日本小児総合医療施設協議会の会員である30施設の担当者に質問紙を配布し，18施設の担当者から回答を得た。18施設のうち，きょうだい支援活動を行っていたのは10施設であり，その内容は，親の面会時にきょうだいを預かる活動，入院している子どもときょうだいとの面会等であった。小児医療における先進的な取り組みを行っている専門施設においても，支援活動が展開されているのは半数程度であり，支援活動の推進には人材や場所の確保などの体制作りに加え，支援方法に関する施設間での情報交換，支援効果の検証の必要性が考えられた。

Key words：きょうだい，きょうだい支援，家族支援，小児医療施設

Ⅰ．はじめに

子どもの病気や治療は，子ども自身だけでなくその家族の生活にもさまざまな影響を与える。特に子どもが入院した場合は，母親が病院で付き添う場合が多く，入院している子どものきょうだいは，日常生活や家族関係の変化を経験する。このような経験をすることで，入院している子どもや親に対して思いやりの気持ちを持ったり，自立心が芽生える等の肯定的な変化を表すきょうだいもいるが，不安や抑うつ等のさまざまな問題を生じる場合も多く，支援の必要性がある[1)]。

このような背景から，欧米諸国では，健康障害をもつ子どものきょうだいも支援の対象者として位置づけ，さまざまな職種が協働して支援を行っている[2)]。日本でも同様に，きょうだいの子どもたちを対象として，支援を行っている団体や医療機関もある。親の面会中に病院で待つきょうだいと遊ぶ活動[3)]や，病棟に入ることができないきょうだいと入院中の子どもとの面会の実施[4)]など，個々の施設での活動は報告されているが，全国の小児医療施設における傾向や現状については不明の部分がある。そこで今回は，全国の「小児総合医療施設」で構成されている協議会に参加している施設を対象とし，健康障害をもつ子どものきょうだいに対して各施設で行っている支援活動の現状を明らかにすることを目的に，調査を行った。

Ⅱ．研究目的

小児医療専門施設で行われている，健康障害をもつ子どものきょうだいに対する支援の現状を明らかにすることとした。

Current Situation of Sibling Support in Children's Hospital
Noriko Ishikawa, Ikuko Nishino, Yuka Domae, Hiroshi Fujioka
1）千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科（研究職/看護師）
2）千葉県こども病院看護局（看護師）
3）つくば国際大学医療保健学部看護学科（研究職/看護師）
別刷請求先：石川紀子　千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科　〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉2-10-1
Tel/Fax：043-272-2759

〔2357〕
受付 11. 8.22
採用 12. 1.11

Presented by Medical*Online

Ⅲ. 研究方法

1. 対　象

日本小児総合医療施設協議会の会員施設の看護管理者またはきょうだい支援を担当している当該部署の担当者で，質問紙への回答および返送が得られた施設および回答者とした。

2. 調査期間

2009年11月から2010年1月。

3. 調査方法

対象の30施設の看護部長宛に依頼文書と質問紙を郵送し，各施設のきょうだい支援活動を把握する立場にある人を回答候補者としてあげ，質問紙を配布することを依頼した。回答候補者は，依頼文書と質問紙を読み，研究参加の意思がある場合，質問紙に記入を行うこととした。回答者は，無記名・自記式の質問紙に記入後，郵送にて質問紙の返送を行った。

4. 調査内容

質問紙は，以下の調査内容で構成した。

1) 施設の概要や回答者の背景

施設の設置主体，病床数，回答者の立場を選択式で，平均在院日数を自由記載式で尋ねた。

2) きょうだい支援活動の現状

きょうだい支援活動の現状について，「行っている」，「行っていない」の二択式で尋ねた。さらに，きょうだい支援活動を行っている施設に対して，現在行っている支援活動の内容・頻度・場所，活動に関わっているスタッフ，活動の対象や条件，活動を開始したきっかけ，活動を行うことで得られている効果や抱えている問題を，自由記載式で尋ねた。

3) 今後のきょうだい支援活動

全施設に対し，実施を検討しているきょうだい支援活動内容と，その活動のために必要な整備の内容について，自由記載式で尋ねた。

以上の調査内容は，共同研究者間で項目を検討した。

5. 分析方法

回答者および施設概要のデータは，単純集計により整理した。またきょうだい支援活動の現状についてのデータは，共同研究者間で検討し，内容ごとに整理した。

6. 倫理的配慮

施設の看護部長および回答者への依頼文書に，研究の趣旨，方法，研究参加の任意性，途中辞退の保証について説明を記載した。また，回答内容の公表にあたっては，個人や施設が特定されないようプライバシーを保護することも明記した。研究参加への承諾が得られた場合に，質問紙への回答および返送をしてもらうことにより同意とみなすことを説明文に記載し，調査は，研究者の所属機関の倫理審査委員会での承認後，開始した。

Ⅳ. 結　　果

1. 回答者・回答施設の概要

対象施設に質問紙を郵送し，各施設の看護部長を通じて，質問紙の配布を行ったところ，18施設の回答者より質問紙が返送された（回収率60%）。

回答者と所属する施設の概要を**表1**に示す。回答者は，施設の師長などの看護管理者が11名と最も多く，施設の設置主体は公立が13施設を占めていた。また各施設の入院患者の平均在院日数は5～21日であった。

2. きょうだい支援活動の現状

回答のあった18施設のうち，きょうだい支援活動を行っていたのは10施設であった。支援活動の内容は，入院している子どもと親の面会時のきょうだいの預かりや保育が8件，入院している子どもときょうだいとの面会の実施が7件，外来受診時のきょうだいの預かりが2件，発達支援が1件であった。2つ以上の支援活動を行っている施設は2施設であった。

3. 各支援活動の現状

1) 親の面会時にきょうだいを預かる活動

入院している子どもと親の面会時にきょうだいを預かる活動を行っている8件の現状について述べる。きょうだいの預かりは，病院全体（3件）や病棟単位（3

表1　回答者・回答施設の概要　【N＝18】

		回答数
回答者	看護管理者（師長など）	11
	看護部管理者	6
	病棟主任	1
設置主体	公立（国立以外）	13
	国立・国立病院機構	3
	私立，その他	各1

Presented by Medical*Online

件)，在宅支援部門（1件）やボランティア部門（1件）で行われていた。活動の頻度は，平日毎日実施（5件）が最も多く，不定期（2件），予約制（1件），詳細不明（1件）であった（複数回答）。活動の場所は，待合室や家族室（4件）と外来やエントランスルーム（4件）のほか，ボランティアルーム（1件）で行われていた（複数回答）。活動の対象者の条件は，入院している子どものきょうだい（6件）であり，その他に入院・外来受診時のどちらの場合も対象にしている施設が1件あった。活動への参加人数の設定は，1回につき5名程度（3件），10名迄（2件）のほか，設定なし（1件）も含まれた。

活動に関わっているスタッフでは，ボランティアが最も多く（6件），次いで看護師（3件），保育士（3件），学生（2件）であった。活動を始めたきっかけは，家族からの要望や意見（4件）のほか，看護師からの意見（1件）があげられていた。この活動を行うことで得られている効果として，家族の面会時の安心感（5件）が最も多くあげられており，面会中のきょうだいの居場所づくり（1件），きょうだいのストレス軽減（1件）もあげられていた（複数回答）。この活動を推進するうえでの問題として，活動支援のための人材や体制（3件），活動の時間が限られていること（1件）があげられていたが，とくに問題はない（2件）という回答もあった。

2）入院している子どもときょうだいとの面会の実施

入院している子どもときょうだいとの面会を行っている7件の現状について述べる。きょうだいとの面会は，病院全体（3件）や病棟単位（3件）のほか，在宅支援部門（1件）で行われていた。活動の頻度は，毎日実施（4件）と不定期（3件）で，場所は病室（4件）や病棟内の個室（2件）のほか，病棟外（1件）で行われていた。活動の対象者の条件は，入院している子どものきょうだいとしている場合（2件）と，長期入院児のきょうだいとしている場合（2件）があり，詳細が不明な回答もあった（3件）。活動に関わっているスタッフでは，看護師が最も多く（3件），次いで保育士（2件），医師（1件）であった。活動を始めたきっかけは，家族からの要望や意見（3件）のほか，きょうだいとの絆づくり，家族の面会回数を増やすためという回答があげられていた。この活動を行うことで得られている効果として，親の安心感，患児の気分転換，きょうだいのストレス軽減，きょうだいとして頑張る気持ちが生まれる，などの意見があげられていた（複数回答）。この活動を推進するうえでの問題として，とくに問題はない（2件）のほか，感染対策（1件）や，面会を行いたい時の部屋の確保（1件）があげられていた。

4．今後のきょうだい支援活動

1）実施を検討しているきょうだい支援活動

今後行っていきたい，または検討している活動の内容については，18施設中16施設の回答者が具体的な内容をあげており，2施設の回答者は現在のところなしと答えていた。現在はきょうだい支援活動を行っていない8施設についても，7施設の回答者が検討している活動内容をあげていた（**表2**）。現在検討している内容では，面会や受診時にきょうだいを預かる活動が最も多く，次いできょうだいとの面会の実施，きょうだいを対象とした病院の環境整備などがあげられていた。

表2　今後のきょうだい支援活動について　【N＝18】

		回答数	回答した施設の中で現在支援活動を	
			している	していない
今後行っていきたい支援活動の内容（複数回答）	面会時や受診時のきょうだいの預かり	8	3	5
	きょうだい面会	5	4	1
	きょうだいを対象とした環境整備	3	2	1
	きょうだいへの説明	1	1	0
	行事への招待	1	1	0
	現在のところなし	2	2	0
行っていきたい活動のために必要と思われる内容（複数回答）	活動支援のための人材	15	7	8
	活動のための場所	9	5	4
	費用	5	3	2
	他職種との連携	2	2	0
	遊び道具	1	0	1
	活動の際の補償	1	1	0

Presented by Medical*Online

2）活動のために必要な整備の内容

実施を検討している活動を行っていくうえで必要と考える整備内容について，17施設の回答者が具体的な内容をあげていた（表2）。最も多い内容は活動支援のための人材であった（15件）。このうち，現在はきょうだい支援活動を行っていない8施設では，全施設の回答者が活動支援のための人材を必要な整備としてあげていた。次いで必要な整備内容として，活動のための場所，費用，他職種との連携などをあげていた。

V．考　　察

今回対象とした日本小児総合医療施設協議会の会員施設は，小児医療の先進的な取り組みを行う専門施設であるが，きょうだい支援活動が行われていたのは，回答のあった18施設のうち10施設と半数程度にとどまっていた。しかし，支援活動を行っていない8施設のうち7施設が，実施を検討している具体的な活動内容をあげていた。このことから，きょうだい支援の必要性を感じ，支援の実施に向けて方策を考えている段階である状況が推察された。今後の支援活動に向けて必要と思われる整備内容への回答に，現在は支援活動を行っていない8施設すべてが「活動支援のための人材」をあげており，支援の実施に至らない理由や課題として，支援活動を推進するための人的資源の確保が大きく影響していると考えられる。さらに，活動のための場所や費用の確保も，支援活動を推進していくのに必要なものとしてあげられていた。親の面会時にきょうだいの預かり活動を長年にわたって行っているボランティア団体の報告では，運営についての意見交換を行いながら情報共有を図り，活動を継続してきたことが述べられている[5]。そのため，きょうだい支援活動を推進していくためには，人材や場所等の確保に加え，支援活動の運営方法，活動を行ううえで起こりうる問題とその対処法等について，情報交換を図っていくことが重要であると考えられる。

今回の調査では，〈現在行っている活動〉と，〈今後推進していきたい活動〉のいずれでも，面会時や受診時にきょうだいを預かる活動をあげている施設が最も多かった。多くの病院では，感染防止の観点から，幼いきょうだいは入院している病棟に入ることができない現状である。きょうだいの預かり活動を行っているボランティア団体の報告では，活動が始まる前は，きょうだいが病棟の入り口で家族を待っている姿や，家族がドアの向こうで待っているきょうだいを気にしながら入院中の子どもと面会をする光景がよく見られていたと報告している[3]。また，きょうだいも活動の中での遊びを通じて，不安，嫉妬，怒り，悲しみなど，さまざまな感情を表現することができると言われている[3]。そのため，きょうだいを預かる活動は，病院の中でのきょうだいの安全面や心理面，居場所づくりのうえで果たす役割は大きい。このような背景から，多くの病院がこの活動に取り組んでいたり，今後行っていきたい活動として検討していると推察される。

次に，今回の調査で〈現在行っている活動〉と〈今後推進していきたい活動〉のいずれでも，2番目に多かったのが，入院している子どもときょうだいとの面会であった。入院している子どもとの面会が不可能であると，きょうだいは身体的訴えや不安・抑うつ傾向になりやすいと報告されている[1]。きょうだいとの面会を実施した事例の報告では，きょうだいと関わることで，入院中の子どもが治療に前向きに取り組んでいけることや，不安等の軽減といった精神面での支援においても重要であることが述べられていた。入院している子ども，きょうだい，そして子どもたちの家族にとって，きょうだいを含めた家族が病院の中でコミュニケーションを図れる意義は大きい。今回の調査で，入院している子どもときょうだいとの面会を行っている施設で，活動に伴う問題をあげていた施設は少なかったが，なかには，感染対策と，部屋の確保をあげていた施設がみられた。きょうだいとの面会を推進していくには，感染予防対策の手順や基準をどのようにするかが課題となると思われる。実際にきょうだい面会を行っている施設の感染に対する手順や基準が，各施設で共有できるようにしていくことが，きょうだい面会を推進していくことにつながると考えられる。

泊は，病気の子どもを同胞に持つことをきょうだいがプラスに考えられるようになるための基本的ケアとして，①同胞（入院している子ども，以下同じ）の病気の説明を受けること，できれば親からだけでなく，家族として医療者からの説明に同席する，②生活している住居を変わらずに世話が受けられること，③通常の生活ができること（通学や通園など），④同胞に面会ができること，⑤きょうだいの年齢にもよるが，両親と同じように同胞の病状に見通しがもてることの，5つの指針をあげている[6]。この指針の中で，今回の調査では実際に，④の入院している子どもときょうだ

Presented by Medical*Online

いとの面会が，7施設で行われていた。また入院している子どもときょうだいとの面会に関する支援は，今後も新たに5施設が行っていきたいと述べており，この活動の重要性が認識されていることもうかがえた。

一方きょうだいへの説明は，今回の調査では行っている施設はなく，また今後行っていきたい活動であげていたのは1施設のみであった。きょうだいにとって，入院している子どもの病状の説明は，不安・寂しさの軽減につながり，患児の治療の支援者であることを認識させるメリットがあると言われている[7]。しかし看護師を対象とした調査では，ほとんどの看護師がきょうだいへの病気説明を行った経験がなかったり，保護者からきょうだいに病気説明が行われているかどうかについての情報を得ている看護師も皆無に等しい現状であることが報告されている[8]。きょうだいへの説明の実施に向けては，今後さらなる検討が必要な活動であると考えられる。

きょうだいを対象とした支援活動は，きょうだい自身だけでなく親に対しても，さまざまな効果をもたらしていると考えられる。今回の調査では，面会時にきょうだいを預かる活動で得られている効果として，家族の面会時の安心感が最も多くあげられていた。また他の報告では，親の面会時にきょうだいを預かる活動の意義として，短い時間でも子どもを預かることにより，母親自身は精神的に余裕ができ，それぞれの子どもとの関係を良好に保つことができると言われている[3]。このように，きょうだい支援活動がもたらす効果として，親の安心感だけでなく，今回はほとんど回答にあげられなかった入院している子ども自身も含め，活動の効果は家族全体に及ぶものであると推察される。今後，きょうだい支援活動が推進されるためには，家族全体に対する活動の効果を明確に示していくことも必要である。

Ⅵ. 終わりに

小児医療の先進的な取り組みを行う施設において，きょうだい支援の必要性は認識されながらも，実際の支援活動は十分に行われていない現状が明らかとなった。各施設により，抱えている問題は異なっているが，支援を進めていくための人材確保は大きな要因であった。現状では，活動の推進にあたってボランティアスタッフが中心となったり，病院内の各スタッフの努力により運営されている状況がうかがえた。きょうだいも含めた家族全体への支援がさらに拡充していくには，支援の効果検証や，人材の確保や環境の整備に向けた，費用面も含めた体制が整備されていく必要性が示唆された。

謝　辞

本研究にご協力いただきました対象施設の回答者の皆様，また対象施設の看護管理者の皆様方に，深く御礼申し上げます。なお，本研究の要旨は第57回日本小児保健学会において発表したことを記します。

文　献

1) 新家一輝，藤原千恵子．小児の入院と母親の付き添いが同胞に及ぼす影響―同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景因子との関連性―．小児保健研究 2007；66：561-567.
2) 平田美佳．“遊び”が子どもたちに与えるもの～英国の小児病院の窓から～．小児看護 2007；30：249-255.
3) 三木美雪，小林二美江，二瓶正子，他．ボランティアによる「きょうだいおあずかり」の活動．小児看護 2009；32：1329-1333.
4) 忍足香澄，出島千絵，竹俣紀代子，他．入院中の患児のきょうだいへの支援―面会を中心に―．小児看護 2009；32：1323-1328.
5) 両角紀子．国立成育医療センターとシッティング「ひまわり」．小児看護 2009；32：1334-1337.
6) 泊　祐子．病児のほかにきょうだいのいる家族への看護．家族看護 2008；6：76-82.
7) 松山　円，石塚未希，黒木香也子，他．自宅から離れた場所で治療を受ける患児のきょうだいへの説明．小児看護 2009；32：1316-1322.
8) 前田貴彦，平田研人，高木喜代美．小児急性期病棟に入院中の患児のきょうだいへの支援．小児看護 2009；32：1309-1315.

Presented by Medical*Online